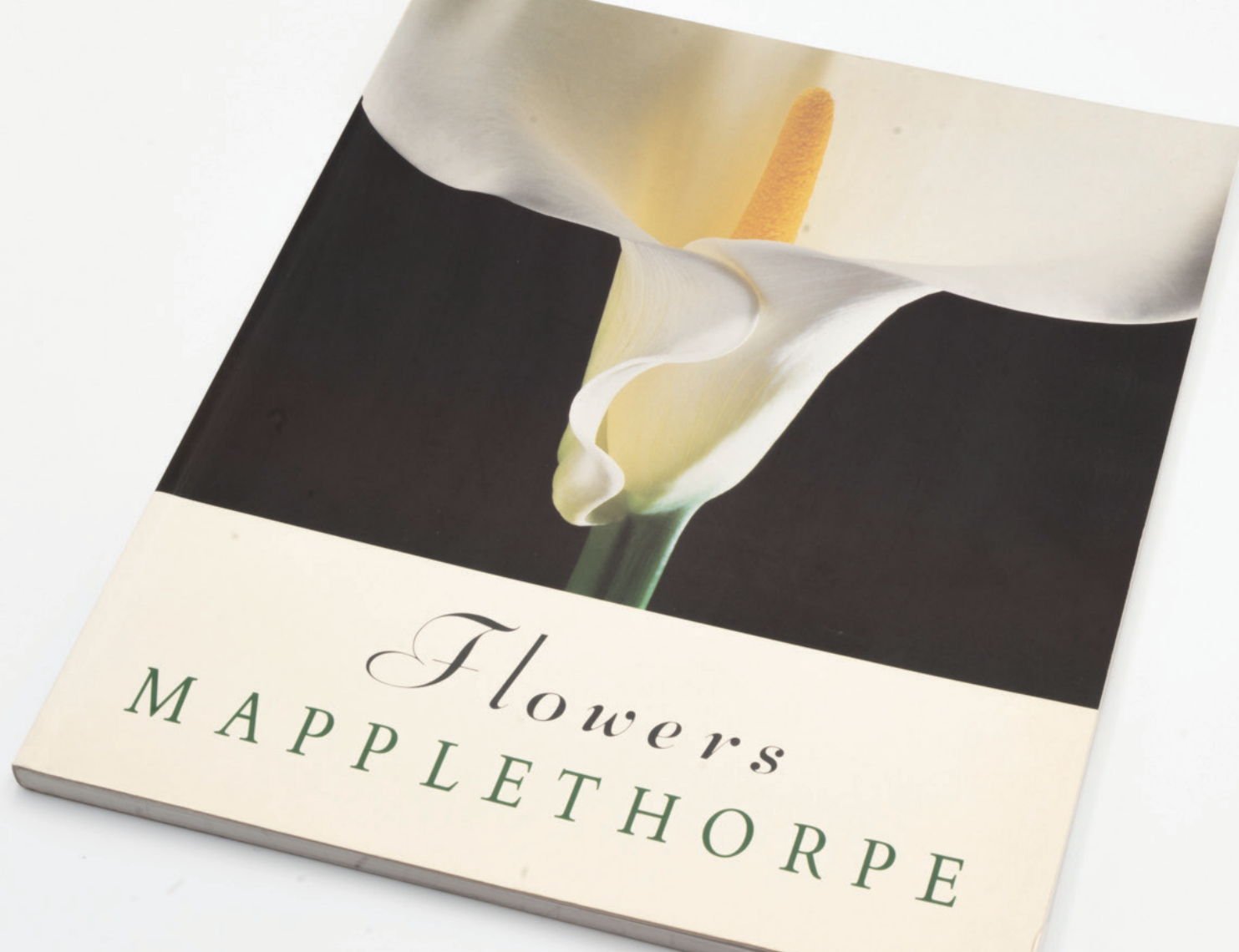


Vol. 4

# Connect



きみは、  
人より  
うつくしい。



ロバート・メイプルソープ (1946-1989)

アメリカ・ニューヨークの写真家。

若くしてアートを志し、写真による作品を数多く制作した。60年代から80年代までのニューヨークのアート文化の重要人物として、今なおファンを魅了する。

ヌードなど官能的な作品が多かったが、花もひとつのアートとして愛した。

本人のエイズが発覚してから3年後、42歳という若さで死ぬまで花をありのままに撮り続けた。バラ、ラン、チューリップなど、それぞれの花は彼のアパートで夕暮れの光と共にレンズで切り取った。

死の直前、

彼は友人たちに別れを告げるため、

モノクロームの写真を送った。

それは、黒い花瓶に生けられている、

しおれたチューリップの花束であった。

時に花は教えてくれる。

美しく咲き誇り、儂くしおれて散っていく

その姿は、まるで人生そのものなのだ。



# 花が持つ、不思議なちから。

## あ

るお寺でハスの花を育てた。  
早朝参りとラジオ体操期間  
中、毎朝お寺に参る人々へ向けた  
住職の計らいだった。

大人から子供までが、参拝後に必  
ず足を止めて、その大きな鉢を覗  
きこた。花は開かずとも、人々を  
惹きつける。

晴れた日には、子供たちはハスの  
葉に水をかけ、葉の上で水滴がふ  
るふると踊る様子を楽しんだ。

いざ蕾から花開いた日、みんな笑顔になった。

慣れない手つきで携帯のカメラを構える人もいた。  
そんな人々を見て、住職も幸せな気分になった。

花は人に幸福感を与える不思議な力があるようだ。



## 日

本での花の楽しみ方には昔から  
特徴がある。きれいに咲いた花

はいつまでも美しく咲いていられない。  
必ず散っていく。美しさを楽しむ一方、  
花の枯れていく哀愁までも、比喻とし  
て人の儂さや無常観を表現してきた。

浄土真宗の宗祖・親鸞聖人は幼少期に

こんな和歌を詠ったと伝えられている。

「明日ありとおもう心のあだ桜 夜半  
に嵐のふかぬものは」

（今美しく咲いている桜を、明日も見  
ることができようかと安心していろ  
と、夜半に強い風が吹いて散ってしま  
うかもしれない）

いつ散っていくとも知れない桜の儂さ  
に、自分の命の儂さを重ね合わせ、明  
日までといえない無常さをあらわして  
る。そんな花の儂さがあるからこそ、  
凜とした一瞬の輝きと美しさが際立ち、  
いつの時代も、今この瞬間を懸命に生  
きている人々の心を惹きつける。







## そつと 寄り添う

**日** 常において身近な花のひとつに  
仏花があるだろう。ここ空知地  
方は周知の通り、かつて炭鉱で栄えた  
町が多くある。

美唄市の写真家・斎藤正司まさし氏は、当時  
の炭鉱で生活する人々を10代の頃から  
写真に撮り続けた。

斎藤氏によると、炭鉱町には菊がたく  
さん植えられていたそうだ。それも一  
本や二本ではなく、たくさん植えられ  
ていた。

その背景には、炭鉱は事故が多く亡く  
なる方も多かった事情がある。炭鉱事  
故で亡くした夫や兄弟に、綺麗で新鮮  
な花をいつでも仏壇に仏花として供え  
てあげられるようにということらしい。  
今でも炭鉱住宅があった土地には、そ

こに自生しないはずの菊が咲いている  
ことがあるそうだ。

人がいつから花を愛し、贈るようにな  
ったのか定かではないが、人の感情  
が揺さぶられる瞬間には必ず花がある。  
愛情、悲しみ、無常の人生観、花には  
人が言葉では言い表せない感情を表現  
する力がある。感情の代弁者だ。

あなたは最近人に花を贈っただろうか。  
桜の花を眺めただろうか。仏花を新し  
いものに替えただろうか。家に花がな  
くても周りを見てみるといい。

食器や服や家具の柄からトイレット  
ペーパーまで、私たちの生活は多くの  
花で彩られていることに気づくだろう。  
花言葉とは、花そのものに象徴的な意  
味を持たせるために与えられる言葉。  
花そのものは何も飾らない。

その姿を見て私達は多くのことを学ぶ。  
花の魅力とは、美しさだけでなく、  
ありのままの飾らない心にこそあるの  
かもしれない。



ちちゅうれんげ  
池中蓮華

だいによしゃりん  
大如車輪

しょうしきしょうこう  
青色青光

おうしきおうこう  
黄色黄光

しゃくしきしゃっこう  
赤色赤光

びやくしきびゃっこう  
白色白光



The Metropolitan Museum of Art.  
Amitayus, the Buddha of the Western Pure Land

ぶっせつあみだきょう ごくらくじょうど れんげ  
仏説阿彌陀経には、極楽浄土〈仏さまの世界〉に咲く蓮華〈ハス〉

の花の描写がある。  
浄土の池には大きな蓮の花が咲いており、様々な色の蓮華がそれぞれ美しく輝いているという。

「ひとそれぞれ好みはあるけど、どれもみんなきれいだね」と歌われるあの有名な曲。まさにこのお経の解説と言ってもいいくらいだ。

どの色がきれいで、どちらの色がいいということではない。それぞれの個性が輝き、それでいてすべてが調和する素晴らしい世界。

他者を認め、今まさに起きている戦争のような争いのない世界。一切のやましい心やけがれがない世界で咲く蓮華は、欲にまみれた世界に生きる私たちが戒めているようにも思える。

## 小噺

花を愛でるとはよく言いますが、中には花を怖がるなんて人もいるようで…

隠居さん！いますか？！

はっつあん、またお前かい。

隠居さん、大変なんですよ！

仏壇の花と目が合うんですよ！

は？

だから、仏壇の花と目が合うんです！

花に目があるのかい？

花に目があるわけじゃないじゃないですか！  
バカなこと言わないでください！

バカなこと言ってるのはどっちだい。花が自分の方を見てると思うのかい？

そうなんですよ！咲いてた花をとってきたおいらに恨みでもあるんですかね？

あのな、仏壇の花が仏さまの方ではなくて、自分の方を向いているのはちゃんと理由があるんだ。その理由を知れば、花が自分を見てくれてるのはありがたいと感じるようになる。

へー、そうですか。それで、理由ってのは？

そうだな、私が教えてもいいが、この先の長屋に花好きで有名なべっぴんさんがいるだろう？その人の方が詳しいから、聞きにいったらいい。

なんだ、また隠居さん知らないんだ。へー、花好きのべっぴんさんね。おいらでも教えてもらえますかね？

なに、「朝顔に釣瓶とられてもらい水」という句があるだろう。その人も花を大切に思う人だろうから、花のことを聞きに行くのに嫌とは言わないさ。

そうですか？それじゃおいらもひとつ、もらい水に行ってみよ！

「朝顔に釣瓶とられてもらい水」加賀千代女

(朝顔の蔓が井戸の釣瓶に巻きついていて、水を汲むために蔓をちぎってしまったのは可哀想なので、隣の家に水をもらいにいった)



# DIARMA

## 花と仏さまと私

法話 坪井友紀

昨年、念願だった「いけばな」のお稽古を始めました。周りには経験豊富な方々ばかり。皆さん、慣れた手つきで颯爽と活けていかれます。まだまだ初心者の私は恐る恐るハサミを入れつつ、他の方と見比べては、「私の出来栄はどう見られているのだろうか？」と気になってばかり。目の前の草花を愛でる余裕はありません。「こんな感じでいいのかな？あぁ、先生！早く助けに来て！」と心細く思っている。絶妙なタイミングで先生がいらして「頑張りましたね。素敵よ。」と声をかけながら最後の手直しをして下さいます。先生は私の感性を尊重されながらも、それぞれの花の持ち味を生かし、枯れていく姿にまで想いを馳せながらお手本を示して下さいます。私らしさを認めてもらえる安心感、目の前のものをしっかり受け止め、精一杯活かしかけることの大切さに気づかせて下さる先生の姿勢に、阿弥陀さまの私たちへのお育てが重なったと同時に、ふと過去のことを思い出しました。

私がまだ20代前半だった頃のことです。あるとき、ご縁があってお坊さんのお話を聞く機会がありました。その話の中で「どうして仏華は阿弥陀さまの方ではなくて、私たちの方に向けてお飾りすると思えますか？」と尋ねられました。会社員の家庭で育った私は、それまで仏華について深く考えたことはなく、そのお坊さんからの問いかけにとても戸惑いました。仏華が私たちに向けられている理由は、私たちに注がれる阿弥陀さまのおこころ（慈悲）を花の姿からいただくためであり、花から感じるこの出来る「穏やかさ」や「あたたかさ」に、「迷いの中にいるあなたを何としても救いたい」という阿弥陀さまの願いを味あわせていただくためなのです。とお話下さったのです。そのいわれを知らされ、阿弥陀さまの存在がふいに身近に感じられ、ホッとしました。当時の私は社会人として働き始めて間もなくの頃で、仕事上での人間関係に苦しんでいる真ただ中でした。「もつと優しく教えてくれたらいいのに！」「どうして私にばかり面倒な仕事を押し付けるの！」などの不平不満や「あぁ、こんなミスして恥ずかしい！」「同期のあの子より遅れをとっているかも？」などと自己嫌悪の日々。そんな中、思いがけず聞いたお坊さんのお話で、私が不満を感じるあの人も、自己嫌悪に陥っているこの私も、同じく救いたいと願って下さっている、それが阿弥陀さまなのです。と知らされたことで、「お互い、阿弥陀さまから案じられ慈しまれている者同士なんだなあ。」とスツと気持ち軽くなった瞬間を今でも忘れられません。そして阿弥陀さまの救いのおはたらきは、今悩みの中を生きている私のためのものなのだ、受け止めていくキッカケとなったのです。

ふと気がつくと、花は私たちの日常にさりげなく寄り添ってくれています。私が仏法を聞く身とならせていただいているのも、私が気づかぬうちから既に阿弥陀さまのお育ての中にあっただと、花の姿が教えてくれるのです。





## Dialogue with Flowers

## 花との対話

長沼町の花屋さん「創 MAOI (そうまおい)」の仏華が素晴らしいと、お寺業界で評判だ。

2月の後半、いつになく雪深い長沼へと足を運んだ。

まずは長沼町中心部から少し離れた「shandi nivas café」(シャンディー・ニヴァース・カフェ)でカレーを堪能。カレーマニアを唸らせるほどの美味しさと評判のお店。スパイスの効いた本格的なインドカレーを食べたい方は是非。他にも「さんぼんぎ」のスパイスカレーもおすすだ。とても気さくな店主が笑顔で出迎えてくれる。

「創 MAOI」のオーナー・佐藤ひろ子さんとは、同町の誓報寺<sup>せいほうじ</sup>でお会いした。こちらのお寺も法要の仏華や、他へ贈るアレンジなどでよく同店を利用するそうだ。

今回は本堂用の少し大きめの仏華を依頼したのだが、用意された花材を見てびっくり。見たこともないような花が並んでいる。聞くと、南アフリカ産のネイティブフラワーという種類の花だそうだ。別名ワイルドフラワーとも呼ばれる個性的なインパクトのある花で、1本でもとても際立つ。

素人目線だと個性的な花をひとつに合わせるのがとても難しそうに見えたのだが、真と呼ばれる主役になる花材を挿してからは、佐藤さんの手に迷いはなかった。そもそも、その一番高さのある真には木の皮を使用していたのでまたまたびっくり。

手際よく立てながら、時折手を止めて、まるで花と会話をしているかのように2〜3歩下がりが静かに見つめる。

その場に漂う緊張感を息を呑んだが、どこか心地よい。きっと花が持つ美しさと、佐藤さんが見せてくれる笑顔のおかげだろう。

「花を立てる時は、お客さんの目的はもちろん、飾る場所や見られ方もイメージする。仏壇へ供える仏華であれば、故人のイメージも引き出す。」  
そんな話を聞いているうちに、完成した花を見て驚いた。

本堂の仏華といえば、松などの緑色に加えて、赤や黄色の花が織り交ぜられた華美なものが多いが、佐藤さんが立てたものはほぼ緑一色。そこにユキヤナギの白やバンクシアの淡いピンクがいいアクセントになっている。

その圧倒的な存在感に思わず取材スタッフ全員が「スゴっ」と口から漏れていた。

「本堂の荘厳<sup>しょうげん</sup>(飾りつけ)は、決して花が主役ではない」と話す佐藤さんに奇をてらった様子もない。持ち上げていくわけではなく、素直にその時そう感じたのだ。

佐藤さんが緑を基調とした花束が好きという思いと、当日の取材スタッフが男性のみだったので、そのイメージも加わったと教えてくれた。





創 - MAOI -

〒 069-1331

北海道夕張郡長沼町銀座南 1 丁目 6-8

営業時間 / 9:00 ~ 17:45 (定休日: 日曜日)

TEL / 0123-82-5678

MAIL / sou-maoui@outlook.jp

<https://sou-maoui.com/index.html>



「創 MAOI」に花を買いに来るお客さんのほとんどが、仏壇用の仏華を求めて来られるそう。  
「自分はアーティストではなく、あくまでも商店。花屋なんですよ。」と話してくれたのが、とても印象的だった。  
町の花屋さんとして、自分を表現するのではなく、あくまでもお客様のニーズに合わせて制作する。  
その飾らない心が、素晴らしいモノを創る源になっているのかもしれない。

お寺へお参りする際、お寺へ行く楽しみのひとつとして、本堂の仏華に注目してみたいかがだろうか。  
花が見えないご縁の種を巻き、お参りをされている方同士や住職との会話にも花を咲かせるだろう。



# Connect

【くうなん広報誌コネクト】  
Vol.004 2022年3月発行  
発行／空知南組  
編集／空知南組広報部

くうなん

検索

くうなん公式ホームページはこちら



私たちは北海道南空知地区を拠点として活動する浄土真宗本願寺派寺院の団体「空知南組」、通称「くうなん」です。

Connect（コネクト）という誌名は、くうなんのスローガンである「つたわれつなぐれ」が由来となっています。

Editors TAKUYA KANNO  
HIDETOMO SUGITA  
TATSUTO NAGAOKA  
Designer HIROYUKI YAMAZAKI